

# 殘花聚園 (十二)

(日本幼兒教育史資料)

## 八、大原幽學の幼兒教育觀(二)

一

六歳になつて、子供の知覺が確なものになり、學習する力が筋立つて來るを考へるのは、必ずしも幽學だけの新しい主張ではない。支那に於ても、我國に於ても遠い昔からさう考へる慣はしがあつた。つまり、子供の精神に於ける内部的活動が、生き／＼と力強いものにもり、上つて來るさいふ見方である。此處に紹介する幽學の兒童觀が、彼れの經驗を觀察から來た獨自のものであつたか、社會的な傳統的な信念に根ざしてゐるたかは別問題であるが、その述べてゐる所は次の様である。

「六歳近く成るに順ふて其勢益々盛んなれば心の移り替る事も亦是に隨ふ」。

「細註」故に智を増ましむるに甚だ六ヶ敷大事なるときなり、また此の五六歳の中に捨塊れものにして、才智を打屈るもの甚だ

東京女子高等師範學校教授

石川謙

多し見て知る可し。

「註」又云ふ人十五歳迄は常に見覺え聞覺えたる事其時其儘直に思ふ事の種を成りて以て其言ひ出る事も亦思惑も日々に才ばしる者なり、道を知らざる人は其子供の才奔るを智恵附たりと心得違てほう笑む者なり。童兒も亦人の我にほうゑむを見て嬉し氣に其圖に乗る者なり、中には五歳六歳の頃は物に才ばしる事騎馬の如し故に才耳舒びて智を増すこなし是を以て唯所謂出來過る事の種ばかり生るなり。是を才に尅るに云なり亦是について愚俗は六歳迄の中に水氣の萬物を潤す如くなる尊き其智を失はしめ利口がましく育る者萬にして九千九百九十九人なるべし。

「細註」夫れ如斯所謂馬鹿の如く育つるに於ては才氣靜かなれば其才に尅る事無かる可し然るに於ては智漸々増むとも微る事無かる可し、又才ばしる事無き童子杯は他人と雖も是を愛

す其愛にあづかるに於ては捨塊る事も無き故に能く人の教を用ゆるなり是れ則ち智なり、然るに於ては人に打屈めらるゝ事無ければ才も直ちに舒びて愈々智を増し馬鹿と成る可きいはれ無し其幽玄を能く味ふ可し、松に譬て是を言へば智を肉にして増者なり故に目に立ぬなり才は丈に舒る者なり故に目立つなり。又云ふ松も丈に舒る事盛んなれば必ず肉増さず瘦て枝葉ども茂らぬ者なり是等の木二三十年を育て風杯の爲に吹き折られ杯して效能薄し、せせこましく植込す唯々間原に植て健に仕立たる松は肉太にして立體具足する故其舒るとも目には立らずと雖も其枝葉も茂り幾丈舒るとも危からず千歳ふるとも年ふる程年々歳々に世の用と成るなり。

人も則ち其の如し幼稚の時才舒る事盛んにして智の微れざる者稀なる可し、亦智微れて才耳丈たる者は必ず災ひを引出す事世俗を見て知る可し故に必ず先づ智を増せしむる事耳能くして以て才是に隨ふて育る時は則ち五常自らに具足するなる可し其年長ずるに順ふて年々歳々に譽有るとも災ひは無かる可し此幽玄を知らずして子を育るは危し。

六歳にして女子は稍々人心地付く故に此頃に至ては小口しく世話する事杯を好む氣味有り其人心地付くに順ひ人を妬み猜むの志出来て来る頃なり。

男子は陽氣多く寛なる徳の備り有る者なり故に六歳にして未だ人心地盛んならず唯見聞く事に才ばしる耳の頃なり。

要するに、六歳頃の子供の心の内部活動は、自然な放棄なものであるから、それを其のままに總て取入れて、正しいもの、賢いものこまづり上げてはならない。中にも五歳六歳の頃は物に才ばしる事騎馬の如し「見るのが幽學の見方である。それ故に、導びいて正しい方向に向け、抑へて誤まれる方向を矯め改めなければ、後年長く過ちを生ずる源となる。此の點から見て、嚴密な意味での教育は、此頃からこそ形を整へて施さるべきである」考へた幽學である。それだけではない。この頃になるさ、女子は漸く女子らしい物の考へ方の芽が出て来るものであるから、男子とは違つた意味での躰をしなければならぬさも考へた幽學であつた。

## 二

七歳になるさ、男の子は、もの見しりの情があらはれて、内氣になり遠慮勝ちになる一面さ、調子に乗つて何處までも才ばしつて働く他の一面さが、調和する事なしに矛盾のまゝ現はれて来るものである。女の子は、此の頃から妬む心・猜む心が段々強くなつて来る。従つて、他人の心を無暗に當推量したり、心の底で意地悪い執着を持つたりして、素直さを忘れてゆく傾向が生ずる。

「男七歳成りてはこゝにふれては遠慮する氣味有りまたこゝにふれては才ばしるこゝ有るさの兩端あり」。

「細註」是れ亦八歳迄の中に人と成りて後の我慢の種と成ること多し。

「女は七歳八歳と漸々妬猜の強く来る頃なり或は及も無き人の心を己れが心の底にて推察し或は年丈たる男子に對るこも懼れたる振りにて心の底に捻塊有る頃なり」。

「細註」此を誡めずして實る男子を恐るゝ事に育てざれば其年丈て必ず氣隨の種と成るなり。

八歳になるこ、男の子供は落着いて、じつくり、物を考へる習慣が出来るこ同時に、後ずさりする、物怖ぢする心もまた生れて来る。女の子は、九歳頃から、物を考へるやうな、人の心を探つたり氣をひいてみたりするやうな氣持も發達して来る。十歳になるこ、言葉遣ひも、身のこなしも、女らしい優しさが生れて来るから、稽古事等はこの時分に始めるのが一番有效である。

「男八歳と成りては則ち人心地付き少しく人の心を問ふ氣味有り亦年丈たる男子に對する時は少し臆するの氣味あり」。

「細註」此年丈たる男子に對面爲さしむる時は必ず情愛薄き人に對面爲さしむ可からず其幽玄を能く味ひ知る可し。

「女九歳と成りては人に對して何歟物思ひの面持有る事多し其人の心をさぐるの氣味有故なり故に其れ相應に

邪痴を専らとする頃なり。

「細註」尤も女子は氣重く物思ひの面も持有時は其心のそこに邪痴有事多しと知る可し。

「人を能く育ひ試したる者ならでは是等のここは或は惑ひ或は迷ふて其の幽玄は必らず知り難かるべし。

女十歳と成りてより漸くに面柔らげき言葉やさしく成る頃なり又た稽古事なきは能く手に入り初る頃なり」。

「細註」尤も女子は嫉妬偏執のみ多くして智無き者なれば此頃迄に善惡邪正を辨する杯は其年長せるに順ふて人の善き噂する杯の種と成るなり別して民家の幼女の咄し上手杯は年取て後の人の噂する種なり。試し見る可し。

「男九歳より十歳の中は唯だ茫然として、心に執り止め無く、唯だ存するが如く、亡ふが如くの頃なり」。

「細註」尤も男子は所謂健かなる者なれば此頃は其心唯其儘なり。

三

男子は、十一歳の頃から、物學びをしようとする傾向が著しくなるから、この頃から十四歳迄の間が、學問にしても、業務にしても、學ばせる一番適當な時期である。此の間に一通りの學習をさせなければならぬ。十五歳と成ると、最早一人前の男としての能力が、すん／＼と現れて来るから、もはや物學びの時期ではない。學んだものを習熟練習

する時期である。女は十三歳の頃になるまで、既に女としての一通りの自覚が出来、氣持が伸びて来るので、女らしい恥かしさ、氣弱さが見えてくる。随つて女としての矜一通りは、此の時期に於て早く完成しなければならぬ。

「男十一歳より物學びの志に力を得るの頃にして二十三、十四歳迄漸々學びの力を得る頃なり」。

「細註 男子は所謂寛なる者なれば物に凝る事鮮し故に育てて方の悪き子は必ず學ぶ事の緩き者なり、然れども教へ方善ければ其れ相應に知るなり是れ亦陽物の徳なり、唯々偏執の種と成る事と臆病に育る事勿れ」。

「女子十三歳迄成りては一婦人たるの能力を備へ唯人の形振り杯に目を配り或は俗に云ふ恥かしき面ばせ多し又其風姿に偏執する故悉く氣弱く成る者なり」。

「註 女子一婦人たるの、機能を備へるに至りては、則ち人迄成りたるものなるゆゑに、十三歳までに見聞きたることは、皆おもふことの種と成るなり、則ち其の常に見聞きしことの風に心の居るを知るべし」。

「男子十五歳迄成りて人の父たるの能力を具備し此時に至りて氣強く成る者なり」。

「註 是れ亦此十五歳迄の其常に見聞きし事則ち思ふ事の種と成りて其思ふ事の器量相應に其行の善惡邪正を顯はずなり」。

又云ふ男子は十五歳女子は十三歳迄の中に人の感る程の頓才有る者杯に道たる所以をも知らしめずして唯其儘に育るにおいては其中年に至りては或は公事訴訟或は分不相應の事を巧み杯して終に不孝不義、非義非道を行ふ者世に多きを見て知るべし危し々々。

「細註 若し幼稚にして頓才なる子を持ちたる者は斯くの如く悪行に陥る事有るを恐れて必ず其頓才を悦ぶ事勿れ必ず愚鈍に似たる事有るを見出し是を悦ぶべし然る時は其幼稚の心自ら能く鎮り智を増すべし、其幽玄は筆端に及び難し故に是を能く味ふて其行ひを勉め試る可し」。

又愚鈍なりと見ゆる程の者は利口にだに育てざれば危き事少かる可し、別て頓才有る童子には道杯を必ず口先にて教ふ事勿れ必ず常に道たる行ひを勤め見せる事こそ大事なる可し。

十四歳以下を少年とし、十四歳以上を成人とする見方も、又、恐らく幽學の經驗と觀察とから生れた獨自の考へではなかつたであらう。「禮記」の記された遠い昔からの支那の社會の慣はしも、影響した事であらう。又、十五歳元服といふ我國古來の社會的習慣も、強い背景となつた事であらう。然しそれにしても、さうした考へ方を裏付けるための具體的な心の運びの發達や、特殊な行動の發達を、細かに觀察して書き上げた、幽學の骨折は一應みこめなければならぬ。(昭和十四年十一月十四日)